



大正十一年二月廿五日 第四百八十八號 每定期月廿五日 發行 (明治四十四年六月十四日) 第三種郵便物認可

木曾と小鳥 菊池生

こんもりした森林で蔽はれてる木曾谷は小鳥の棲家としては誠に結構な所ではあるまいか。こゝで彼等は充分な食物を得る事が出来る。こゝで彼等は静かに休む事が出来る。そしてこゝで大に繁殖する事も出来る。従つて木曾は鳥類の調査研究には以てこゝの土地であると思ふ。自分は鳥學研究者としての權威黒田氏の指導の下に去年の暮から木曾谷にて見られる小鳥類の調査を始め居る。

然し鳥類の研究はなかく、六ヶ敷もので一人二人の力では到底満足な事が出来るものではない。諸君の御援助にまたねばならぬ。今までに黒田氏の鑑定を願つたのは次の如くである。その中の幾羽かは學校に標本として永久に保存したいと思つて居る。

ゴジフカラ(方言マツカ)、コガラ(方言ヒガラ)、ヒレンジャク(アカホヤ)、キレンジャク(キホヤ)、ヤマセミ(カハネギ) オホマシコ(アカハギ、クロハギ、ハギマシコ)カシラダカ(カシラホウジロ)ハクセキレイ、セグロセキレイ、キセキレイモズ、アラジ、スズメ、ニウナイスズメ、ジャウビタキ(ヒタキ)タヒバリ、アリスイ、ラシドリ、ツグミ(ツグメ)シロハラ(シヤマ)アカハラ(カキミヤマ)シメ、マヒワ(ヒワ)、コカハラヒワ(カワラヒワ)アトリ、イカル(イカロ)カヤクバリ(ク

ロジ)ホウジロ、カハガラス、コガラ(キマワリ)、クマタカ(クマ)、カケス(カシドリ)、キシバト(ドバト)、ヒヨドリ(ヒヨ)シロバライスカ(イスカ)、ナキイスカ(シマイスカ)、ウソ(アカウソ、クロウソ)、ベニバラウソ

以上の内、和名イスカは数少なく大形にて木曾地方にて云ふイスカはシロバライスカと言ふもの、由。そして羽毛の色の變る事や嘴の交叉が右左、反對の者も見受けられる。それからシロバライスカに似て翼に二條の白帯のある種類は和名、ナキイスカで私の手に入つた数は三羽のみである。シロバライスカに比べて餘程巧に囀へする。従つて鳴きイスカの名の出たものと思はれる何羽でも手に入れたいと思ひます故御心あたりの方は御通知下さいウソに就ては雄は頬紅く雌は黒い。下面及び頬とも同じく紅いものはベニバラウソと申すもの、由、方言に關しては福島の中津屋又は新開村の獵師等から聞けたもの故不十分である。カヤクバリをクロジと思ふた如き今後更に調査の必要がある。山林學校の廻りには年中小鳥が歌ふてる。演習林にはヨタカの子が居たり鶯の巢があつたりする。夏になると郭公やホト、ギスが來て鳴く。黒川の邊りにはセキレイの類が巢をつくる。キツ、キ、フクロウ、ミミヅクにも色々の種類が居るらしい。駒ヶ嶽御嶽には以前は雷鳥其他の珍品が無數に棲息して居たさう

友 林 蘇 岐

だが今日では滅法に見られなくなつた。保護の必要がある。調査の價值があると思ふ春から秋にかけて鳥の巢と卵を是非探し廻はる考である。

検査セ ヲヅミ、 ヲタカ、 フクロ、 し鳥類 (三羽) (七羽) (二羽) 胃中にあり 六八 三四七 三九

森林の害獣としては鼠と兎が尤も被害が大いさうだが。フクロ、ミ、ツタカカの種類が之を捕へてくれる。其他数へ来れば澤山あらう。米國では鳥の研究も進んで居り其愛護も行き届いて居る。禁獵區等へも充分に手を入れて居る。

せなければ駄目である。そしてつと徹底的に保護を加へなければいかぬ。

雪國等では冬季は益鳥の爲めには餌をやるがよい。下草等は鳥がかくれ又巢を造る關係上成るべくとらぬかよい、樹に空洞を製つてやつたり又特別に箱巢を枝にさげる事も鳥の愛護の一法であらう。小川の邊に灌木類を殘留せしめる等も鳥の爲めにはよい事であるが果して如何なる点まで實行されて居るであらうか

杉造林事業收支計算

二日 生

本項は秋田縣仙北郡の篤志林業家其の民林に就き大正五年の調査に係り従て經濟界の相異せる現時とは大に其趣を異にし人夫賃初め諸經費の單位に著しき相異あるを免れずと雖も亦収入の項に於ても差異あるを以て若し兩者の差異の率相近き場合は相殺の便あり然れども果して如何は識者の判斷を乞ひ敢て拙筆を加へざる原調査有の儘のものなれば讀者幸に是れを諒せられ度し要は識者の批判を仰ぎ又初學の士に對し其一例を表示せしに止まるものとす

杉一町歩造林收支計算

支出の部

- 一金六圓 地拵人夫十五人の賃金一人一日二百坪作業一人の賃金四十錢
此利子金百四圓五十二錢
(五十ヶ年分六朱の重利以下同)
一金二十二圓五十錢 杉苗木四千五百本代
此利子金三百九十一圓九十五錢 (五十ヶ年分)
植付人夫三十人の賃金一人一日百五十本植
此利子金二百九圓四錢 (五十ヶ年分)
植付翌年より下刈人夫一ヶ年十五人宛五ヶ年分延人夫七十
五人の賃金一人一日二百坪作業
此利子金四百三十三圓九十八錢
(平均して四十七ヶ年分計上)
一金四圓 植付後八年目下刈人夫十人の賃
金一人一日三百坪作業
此利子金四十一圓 (四十二年分)
植付後十年目掃除人夫賃一人
一日三百坪作業
此利子金三十七圓十四錢 (四十年分)
五十年間見送り人夫延人員
百八拾二人五分の賃金但し
一人百町歩の割にて一町歩
當り一ヶ年三人六分五の巡
視同時に藤蕁等伐拂を兼ね

友 林 蘇 岐

此利子金五百九十五圓二十四錢

平均三十八年分計上

一金三圓 十五年目現存杉立木二千二百五

十本技打人夫賃一人一日三百本

七人五分の賃金

此利子金二十圓五錢 (二十五ヶ年分)

一金三圓四十錢 二十年目現存杉立木千六

百八十八本打人夫賃一

人一日二百本宛八人五分

の賃金

此利子金十六圓十二錢 (三十ヶ年分)

一金三圓六十錢 植付後二十五年目現存杉

立木千三百五十二本枝打

人夫賃一人一日百五十本

宛九人の賃金

此利子金十一圓八十五錢 (二十五ヶ年分)

一金二十五圓 五十年間國稅縣稅村稅合計

一ヶ年稅金五十錢宛五十ヶ

年分

此利子金二百三圓八十五錢 (平均三十

八年分計上)

一金三十六錢 十五年目間伐收入金十八圓

に對する所得稅金

此利子金二圓四十錢 (三十五年分)

一金一圓十二錢 二十年目間伐收入金五十

六圓二十錢に對する所得

稅金

此利子金五圓三十一錢 (三十ヶ年分)

一金一圓六十八錢 二十五年目間伐收入金

八十四圓二十五錢に對

する所得稅金

此利子金五圓五十三錢 (二十五ヶ年分)

一金五圓十八錢 三十年目間伐金二百五十

九圓二十錢に對する所得

稅金

此利子金十一圓四十錢 (二十ヶ年分)

一金七圓二十五錢 三十五年目間伐收入金

三百六十二圓八十八錢

に對する所得稅金

此利子金十圓十二錢 (十五ヶ年分)

一金十圓四十五錢 四十年目間伐收入金五

百二十二圓四十六錢に

對する所得稅金

此利子金八圓二十五錢 (十ヶ年分)

一金七十二圓六十六錢 五十年目皆伐收入

金三千六百卅三圓

に對する所得稅金

此利子金千二百十九圓四十錢 (五十ヶ

年分)

一金七十圓 土地一町歩の價格

此利子金千二百十九圓四十錢 (五十ヶ

年分)

支出合計三千七百七圓三十五錢 (利子金共)

收支の部

一金十八圓 植付後十五年目間伐收入金但

植付總數四千五百本の三割は

枯損其他劣等木にて收入なく

二割 (九百本) は一本價格金二

錢計上伐木收入金は人夫賃を

控除せる純收入を計上す

以下同し

此利子金百二十圓三十五錢 (三十五ヶ

年分利子年六朱の重利以下同し)

一金五十六圓二十錢 廿年に至り第一回間

伐の殘木二千二百五

十本の二割五分即ち

五百六十二本の間伐

木收入金 (一本十錢)

此利子金二百六十六圓五十五錢 (三十

年分)

一金八十四圓三十五錢 植付後二拾五年目

立木千六百八拾八本の二割三百三拾七本

の間伐木收入金但し一本貳拾五錢 (長木

にて賣る)

此利子金貳百七拾七圓拾八錢 (二十五

年分)

一金貳百五拾九圓貳拾錢 三拾年目立木千

三百五拾一本の二割二百七拾本の間伐木

代金 (一本九拾六錢材積八拾才の見積)

此利子金五百七拾圓貳拾四錢 (二拾ヶ

年分)

一金參百六拾貳圓八拾八錢 三拾五年目立

木千八拾一本の二割二百拾六本の間伐木

代金 (一本壹圓六拾八錢材積百四拾才の

見積)

此利子金五百六圓五拾八錢 (拾五ヶ年

分)

一金四百四拾九圓八拾錢 四拾年目立木八

百六拾五本の二割百七拾三本の代金 (一

本貳圓六拾錢材積二百才の見込)

此子金參百參拾五圓參拾四錢(拾々  
年分) 一 金參千六百參拾參圓 五拾年目皆伐六百  
九拾二本の代金但し一本五圓二拾五錢材  
積三百五拾才の見積  
収入金合計金四千八百六拾參圓參拾參錢  
子合計 金貳千七百七拾六圓貳拾四錢  
外 金七拾圓 土地代  
合計金 七千九圓五拾七錢  
差引金 參千參百貳圓貳拾貳錢  
即六朱の利息以外の収入なり

北海道見たま、 増田生

僕が初めて北海道に渡つたのは大正三年の  
九月だつた、青森から連絡船に乗つて津輕  
海峡を渡り札幌に着いた時は最早や内地氣  
分より離れて最初は不安と寂寥とを感じ親  
しい所は何時にも見ひ出されず低い和洋折  
衷の家並が北海道と云ふ感じを一層深くし  
た、然し日一日と風物に慣れるに従つて何  
とも云ひ得ぬ愉快さを覺ゆる様になつた。  
一度野邊に立つて際涯のない石狩平野を見  
渡した時將又牧場のエルム木の樹の間に新し  
い空氣を呼吸した時凡ての小さな反抗心な  
失はれて北海道と僕とは全く他人でなくな  
つた、

ば枝の間にキビタキ、オホルリが飛んで  
居、郊外に出れば水は緩く音なく林を廻つ  
て流れ水際の葦荻が徒らに長く牛や馬豚の  
仔が人懐かしげに木柵の間から首を出して  
居た、  
最も愉快を感じたのはこの九月だつた、拾  
月に入ると山も林も野邊も色づき初めしエ  
ルムに纏ふツタウルシが真赤にモミヂ、ヤ  
マウルシ、タルデ、ヤマブドウ等が濃く染  
り夜道路の角々に薄暗いランプをつけてト  
ウキビ賣る男女のバチ／＼と焼く音立て、  
街通る人々の空腹に訴へるのはこの時であ  
つた、  
鮭が獲れ出す頃から爐の邊りが懐しくなつ  
て拾月初旬より置く霜は日毎に其白さを加  
へイタヤカヘデが奇麗に紅葉し畑で農夫が  
忙しく甘藍の收穫をした後を馬に曳かせて  
ブラウを進める様になる、此月には多くの  
人々が紅葉を探るべく近くの山に志す、然  
し紅葉狩りの還るさ行手に柿の果に秋の趣  
きを味ふ事は出来ないがメイゲツカヘデの  
木の下に夕榮の雲の影の如く華かなるは又  
格別の趣きのあるものであつた、然し秋と  
しては北海道には甚だ短い、拾一月になれ  
ば林檎は已に籠に收められ初雪がチラ／＼  
降り出しよい實りを與へたこの年の土も全  
く埋められ拾二月に入れば所謂根雪とな  
つてこれから翌春までは黒土を見る事が出  
きなくなる、人力車は人力橋となり家々の  
軒には四、五尺もある氷柱が垂れ並ぶ様に

なればスケチンが初り鏡の様に凍つた  
道を小供が下駄スケートで滑つて行く、夜  
カーテンをか、けて北の方を望めば透き通  
る様な空にキラ／＼と北斗七星が傾いて居  
て馬橋の呀れた鈴の音がチリン／＼と夜の  
寒い空氣を傳つて響くのが甚だ詩的であつ  
た、一月二月になると時々吹雪が襲つて來  
た、これは北海道名物の随一たるもので日  
本海の波濤を越えて吹いて來る西此利亞風  
が砂の様な雪を伴つて襲來するや忽然とし  
て此處に猛烈なる大風雪の壯觀は現出する  
のである、長い時は二、三日も續く事があ  
るが長くは一日若くは半日、時として數拾  
分位で止む事もあつた、聞けば其の激しい  
時には往々一秒三拾米の風速を現すとの事  
にて天地晦冥濛々咫尺を辨じ難く凄絶なる  
事は到底筆紙に盡す事は出来ない、僕も且  
つて學校より通る途中校門より一町内外の  
箇所にてこの吹雪に出遭ひ道を夫ひ戻る  
事も出來ず顔手は凍傷し已むなく附近の人  
家に救ひを求めた事があつた、實に危険な  
るは此の吹雪である、然し室内は内地人の  
相像する事の出来ない程完全に防寒の設備  
が出来て居る、それで學生時代にはよく室  
外音なく凍りつゝある時ストーブの周りに  
皆が集つて話し初めると直ぐコンパをやる  
拳に負けた者が外套引き被つて出て行く。  
残つたものは自然にストーブに近よる、ス  
トーブの上の鐵瓶から蒸氣が軟らかい音を  
立て、出、薪の燃ゆる音がゴ／＼と鳴り

續けて居るので暖かきの爲めに自然に皆が  
沈黙を守つて考へることもなく漫然として居  
ると睡くなつて來る、こんな時誰れかが口  
を切るど話は飛びながら何所までも續いて  
行く御國自慣から諸國の風俗に移りさては  
林業問題を論ずるかと思へば御互の棚下し  
が初る、其所に使の者が鼻を赤くして歸つ  
て來る、風呂敷が傾げられるとモナカが出  
る、金鑄が出る、生菓子、林檎が出る、白  
湯を啜り乍ら思ひ／＼に手を出す話は一段  
に進む、菓子が盡きても話は盡きない漸く  
時計臺の拾時の鐘に驚いて解散する戸外に  
出れば針指す程寒い沈黙の中から「鍋焼き  
うどん」

三月になると雪が表面から少しづつ、溶け初  
める、壯快なスキーは此時期が最も盛んで  
ある、四月に入れば懐しい黒い土が果から  
果に亘つて現れ萌出た若草は一雨毎に色  
を増しエルムも芽込んで來る山の裾には福  
壽草が黄な花を開きミツバセウが低い添つ  
た所に生れ出し此所に冬の幕は閉ぢられる  
五月になれば時計の針が働くの惜しむか  
の様に響き淀む様な暖かさに山櫻の花が開  
き少し遅れて梅が蕾を破り萬の花が一時に  
咲き競ふ、これ北海道の五月の春である。  
花見は此時が盛りで官廳銀行會社其他道内  
總ての人士は北海道年中行事の一つとして  
最も愉快に過す然しこの歡樂の時期は僅か  
に一ヶ月の間に過ぎないが半年の冬籠りの  
鬱屈を散じ浩然の氣を養ふには決して不足

ではない春が過ぎて夏になれば山登りが盛  
んで殊に學生連は手稻山藻岩山から樽前山  
羊蹄山ヌタツバカウシへ山に胴籠を下げて  
出かけ樺太方面に視察旅行をする者が澤山  
ある、  
要するに北海道の自然は雄大である、氣候  
も木曾地方と其れ程異ならず夏は涼しく冬  
も吾々の活動を阻礙する程寒からず社會は  
一般に活氣に富み舊來の抱束を超越して別  
に一種の氣風を形成せんとして居る、尙林  
學方面にも諸種の興味ある研究材料にも富  
んで居る事は論を俟たない、尙北海道の風  
俗習慣等に就き述べて見たいが此れにて筆  
を置く。

死と生との一面の考察

帝大 長坂清人

我々人間生活をなすに當つてこれを價値  
あらしむる爲に努むべきものは修養と研究  
と娛樂である。修養は苦心を、研究は努力  
を、娛樂には高尚を主眼とせねばならぬ。  
我々は漫然と生れ漫然と死するものでは  
ない。一定の理法の元に終始するものであ  
る、生を享くる事即ち我々人生の嚆矢であ  
る、然らば生とは何であるか、この問題の  
解決は今古來の碩學努力によつても尙不  
鮮明不確實である、又我々の人生は死を以  
て終るが死とは何であるか、この問題も生  
の問題と同様に重要にして而も適確を欠く

のである、然し乍ら人生は生と死の中間經  
路であるが故に始めと終りに對する概念な  
くして人生を送るといふ事は人生をして意  
義あらしむべき基調を欠く様な氣がせぬで  
もない、そこで科學を修めつゝある者とし  
ても考察を述べて見たいと思ふ。けれ共少  
し手にあまる問題らしい。  
昨秋「首相暗殺さる」という號外を手に  
凡た時實に萬感交々至るを禁じ得なかつた  
詞は少し妥當を欠くのが形而上學的的人生  
觀と形而下學的的人生觀——勿論これは乏  
しい自己の偏見的曲解に過ぎないかもしれ  
ぬが、兩者の間の調和に惱む現在にあつ  
つて首相の凶變は可なり大なる刺撃であつ  
た、安田善次郎氏の殺害せられたのも別な  
意味で感動を與へられた  
ニオチエを啗り ショウベンハウエルを  
覗きカントを眺めて非常に壓迫を感じ又一  
方ラポックの安つばい人生觀や(失言の罪  
はグリードマイスターに歸すべきである、  
というの)氏はラポックの説を拾把一から  
げ一山いすらの投資物だといつたからであ  
る(子供騙しの様な實験倫理の道徳觀に輕  
侮の眼をなげたり、近頃流行のマルクスに  
もクロポトキンにも並に似而非社會主義に  
もこれだと思ふ様な共鳴を見出し得ずして  
遂に首陽山の巖でも食つて「吁我何歸手」と  
氣の利いたつより而も間諜付いて居るの  
である。そして結局「人生はなるやうにし  
かならぬ」といふ様棄鉢心持になつて宿

命論的に単法な隠れ家を求めたりする、要するに、不安と焦燥と、煩悶は現在の心のトウタルである、これも時代の罪かもしれぬ、理由は解らないが兎に角生物學的意味における以外では死後における生命を信じ得ない現在では此の世における生命だけしか考へる裡に這入つて来ないのであるが、一時間後さへ豫知出来ず懸崖の一步前まで来て居ても意識せず、目かくしして、地球の土に坐つて、ギターの弦が皆切れて一本しかないのにそれを掻きならさんとして居る様な我々に取つて生命の考察は先づ第一歩であるやうな気がする。

いかめしい標題を掲げて置いて大部脱線したが、林友はアルバートの報告集でも、街學者の遊戯場でもないだらうから大目に見ておいて貰ひ度い。

扱て少し本論に進むのであるが、實際生とか死とかいう問題は難しい問題でつまりは井蛙の管見に終るだらうが、其處にまた何らかの暗示的氣分を見出し得られるは筆者の望は信の値で酬ひられたのである。

一、死

「何物も常住不漸のものはなく、變化は萬象の姿である、一切のものはこれ(存在)ザイン」と、生成(ウエルデン)との永劫の流にすぎぬ」と、ヘツケルは謂つて居る。生といひ、死といふもこれ畢竟比較的の詞であつて、其間に絶對の差別を認め得ぬものである。生死の問題は生物學といふ汎様の

元に概括せらるゝ、凡ての分科の根本基調をなす問題であつて、而も今日向これが完全なる解決を得ざる事は我々の一大遺憾とせねばならぬ「死は生あるもの、特徴である」とさへ我々は斷言するを躊躇する、何故なれば「生あるもの」とは何であるかとの問に對して答辨出来なからである。死の問題は生の問題と終始するものであつて凹出

凹出の紙を以て圓筒を作つたとする、これを内面から見れば凹面であり、外面から見れば凸面である。而も二面は相對的に存在するものであつて、真の一を害する事なくして他を在存せしむる事は出来ぬ、凹面を破らんとすれば凸面も從て破れ、凸面を存在せしめんが爲には凹面も在存せしめねばならぬ。死を論ずるには生を豫想しての上である兩者は共存の半面であつて所謂形の影に伴ふ如きものである。而もこれを分つて考へる仕方の誤つて居ない證明は直線のみにて曲面が作らるゝ、事を知つて居る人々には明白な事である。ある人々はこゝにいふ説を出して居る。少し問題はデリケートになるが精虫といひ、卵細胞といひ何れも父母の生命の一部である、從て兩者の合體によりてて生する子供は父母の生命の延長であり、父母が死んで了つても實は其の生命がなくなつたのではなくて、子供がいふ形に於て生きて居るのであると。此の説によれば死といふ觀念は非常に極限せられた範圍

に於てのみ成立つものであつて、一般には死といふ事は子供のあふ以上無いわけになるけれ共、今茲で考へたいのは個體の生死であるからこの説は正しいが暫く預りにしておき度いと思ふ。

今興味ある一例を諸君の前に提供する、マホット教の一派にフアキールといふのがある、フアキールは自由に自分の生命を絶ち自分の生活表示を凡て止み得ると言ふかゝつて一旦死人となつて葬られても後再び掘り出されれば蘇生する事が出来る相である。この事はキーマス、ブレイドといふ人の書物にある事であるが、その實例を擧げて見やう。

今興味ある一例を諸君の前に提供する、マホット教の一派にフアキールといふのがある、フアキールは自由に自分の生命を絶ち自分の生活表示を凡て止み得ると言ふかゝつて一旦死人となつて葬られても後再び掘り出されれば蘇生する事が出来る相である。この事はキーマス、ブレイドといふ人の書物にある事であるが、その實例を擧げて見やう。

フアキールの同志は氏の面前で箱を出し蓋を開いた、封蠟は全く變化なく袋も舊態の儘であつた、袋を開いて、死んだフアキールを取り出したが身體は全く剛直(リゴール、モルタイス)の状態であつた。茲に

於てフアキールの頭上に湯を注ぎ更に熱湯を滿せる桶を頭上に横へ鼻や耳や口につめられた封蠟をヌツカキ取り除き食ひしはつた齒を暴力を以て開き、振れて居た舌を前に引き出し、臉を摩擦して居ると、やがて身體をブルブルと微動し始め遂に眼を開き、呼吸を始め、硬ばつた皮膚が軟になり艶をさへおびて間もなく言葉を發するに至つた、そして氏に向つて「今此の事を信するか」といつた相である。茲に於て死の本質は難がしくなる。我々は一時的な生活表示の停止を假死と名付ける、蛙や蛇の冬眠も廣い意味に於ては假死の一例である。

よく講談本なんかには棺桶に入れられてから生き返つたといふ話があるが強ち嘘だと計り言へないのである。英國のトゥンセン

ドといふ軍人は人の面前で呼吸を止め脈搏を絶ち全く死の有様を示して後、舊に復する事が出来たといふ。

レウエンホツタといふ人の書いたもの、中にもこんな例がある。屋根裏や墓場にあるマクロビオトウス、フーヘンランデイは呼吸も運動も示さない固いものであるが、これに水を與へると生きかへつて手足を出し遂に運動し始めるといふ、アミーバ、扁虫又は小麥に害をなすアングウイブルリデンは假死を示す。フアキールの六週間假死を可能とする問題は少しこみ入つてくる扱て通常人間の死は、心臓の搏動停止と肺臓の呼吸停止とを標準とするけれ共これ

は随分亂暴な話である、たとふ脈搏と呼吸が止んでも、筋肉は剛直を表す筋肉の生活表示は收縮であつて、剛直は明かに收縮の一種である、又鞭毛表皮は心臓が停止してから數日間生きて居るし、白血球は更に長く生きて居る、であるから心臓が止んでから三拾四時間たつて葬るといふのはまたすつかり死にさらぬ内に埋めらるゝ事になる。

死といふからには其の個體全體の死でなければならぬ、然るに死は部分によつて遅速がある、個體に依つて差異がある。又生との境界も嚴密に定められない。然し通常の意味に於ては生活表示の永久的停止を意味するものであるといつて居る。

二、生

「親しき友よ、あらゆる理論は灰色なのだ、綠なるは人生の黄金の樹である」とゲーテは言つて居る。併しながら「なべての美しき綠は灰色の土から出来て、灰色の土によつて培はれつゝ、あるものではなからうか、政治や、法律や、殖産工業や、美術教育宗教や、是皆活世界を裝ふ緑のこき樹木である。而もその從て立ち、因りて起る所以のものを求むれば唯一つ「生命」てふ灰色の土に歸着するものではなからうか、今の世花よりも團子に、書物よりも十露盤に

理を離れて實につく有様である。實に就くや固より佳矣。而も之が爲求理を離るに至つては徒に綠の影のみを追つて、灰色の土を忘れたる者ではなからうか」と永井潜氏は理屈をつけて居る、理屈は何うでもい、「命なりけり小夜の中山」で命はやつぱり第一だ。然し悲しいかな今日では尙命の真相が解らないのである、人間の歴史あつて五千年、地球上に生命あつてからは無慮幾千萬年たるかを知らぬ而も今尙之が真相が明ならず又當分明になり相でもないのは、さても、人間は愚な者だと思はざるを得ない、コムトと言はせると「一切角出来上りかけた仕事も人に死があるために、子孫が又新しく始め直さなければならぬから進歩し難い」といふ。こんなくだらぬ事でも社會學では法則の一つだ相だ社會學なんといふ學問は閑人が寄りあつまつて、捏つち上げたものかもしれぬ、餘計な悪口をいつたけれ共學問と名のつくものにはみんなこの様な臭味がある。わかり切つた事をわからなくするのが學者であるといつた人もあるが一面の真理だ。生も死もわかり切つた事だ、それを今までの學者が屁理屈をこねてわからぬものにしてつたか、こゝういつて可へばそれまでだが、わかりぬものにしてつたお蔭に電車も出来たし、汽船も出来たし、電信も、電話も、飛行機も出来たんだから、學者は可愛い、者どどと少しく彼等の言ふ所を聞いて見やう

我々が生なる概念を得るのは生の本質の第一次的性質によるのではなくて生の本質が我々の前に展開する第二次的性質によるものである。即ち飛ぶとか、はねるとか、飲むとか、食ふとかいふ様な個々の生活現象をまとめて、生命といふ概念を作り上げるのである。だから我々が通俗に生命といつて居るのは、實は個々の生活現象の總和又は種々な組合せに過ぎない。

今日我々は生命の性質に關しては色々の研究を有するけれど、其の本質に至つては尙全く不明といつて差支ない（假説はあるけれど）其故これから我々のなすべき仕事は、二次的性質として現れた、個々の生活現象を規定し、攻究し説明しつくして以て生命の本質をつき、第一次性質を明にして本質を見極める事である。

これが成じとげられた晩には、世の中は實に變化を來すに相違ない、先づ第一、人間が實驗室でせんで、製造される様になるだらうし、從つて男でも、女でも美人でも色男でも、お好み次第と言ふ事になる、こうなつたら大變だが當分はこんな事もないから醜男も、醜女も安じて可なりだ。然し「相像は創造」であるから油断もすきも許さない雷と拜められた猛烈な神様も今では電氣と名をかへて散々にこきつかはれておる、それでも此奴は強情でまだ地金を現さないのて本質は不明だ相である、假説として古來一流體説、二流體説があり、今を以て二流

體説が優勢で大抵これで説明して來たが、近來電子説や素量説が出てきて、一流體説にも理由のあるのが明になつた相である。電氣の事は人の畑の芋だから何んな出來榮だか知らないが世の中も恐ろしい事になつたわけだ、所で我々が生命の本質をつき前に、個々の生活現象を研究し盡さねばならぬ、これが中々に厄介である。

分類するに營養、呼吸、成長、生殖、運動になるみんなわかつて居る様で解らない事である。更に別な立脚地から分類すると、新陳代謝と勢力轉換である、考へ様によつては大腦皮質の轉質ともなれば、蛋白質の不可思議性ともなる、大手より弱手より様々に苦心して真理の扉と合鍵を作つておるあらゆる方面に於ていくつかの扉は開かれた。然し最後の黄金の扉は尙固く閉じて、神秘の光をなげて居る……とだけ書いて擱筆しやう、機があつたら「生」の部分の補を仕度い。 一九二二、一、一〇

或る夜のA

エス

今消燈の鐘の響いて舍内は漸く太古の静寂に歸らうとして居る。時々この沈静を破るのは、天井裏の鼠族の活動のみ。Aはベッドの上を轉々しつゝ、追憶にふけつた。夫はもう三年の過去になつた。初夏の水々しい縁が、すべてのものに生氣を與へて

暖い太陽が萬物に祝福をたれて居る頃の或る一日、Aは友達のH、MとS公園にあそんだ。落葉松の甘いかきりを楽しみながらF町水道に沿つて夏草の叢を分けて進んだ。K町の底から湧き上る風は彼等の裾を弄て顔を撫で、一味の涼しさを與へては去つた。通ひ馴れた谷向の部道を運送馬車の追はれて居るのが見ゆる。生存に疲れ果てたかにも倦怠味の漲つた馬の歩み、主人に對して絶體無抵抗な忠實なる僕の、物憂い歩みは馬子をじらした。ビーンツ神經の末端を針で突く様な鋭い口笛の叱咤が彼には感じられた。

運命の服従者 彼の動物の氣分がよく味へる様に思つた。MもHも黙つて居る、そして心の幸福を其の微笑に含ませ乍らズンズン先になつた彼等はやがてK寺の境内に來た。かなり大寺ではあるが幾年前火事に灰となつて今は再建されたばかりの本堂の殺風景さに其の古雅と幽麗の連想を妨げられて、僅に勅使門のあたりと庭園の一部にありし日の思い出をしのばせるのみである。彼等はK寺の境内から本道に出て急な石ころの多い坂から〇所橋を越へてS山公園に上つた。

夏草の甘美なむせる様な匂ひの漲る道を右に折れ、左に折れ中腹の廣場から、更に左へ進んで程よい木蔭に言ひ合した様に横たはつた。三人は汗ばんだ肌を風に入れ乍ら漸く元氣づいた、そして學課の事、級友

の事、他愛の無い話しに其の青春の氣焔を上げたが、其の中にAの身の上話が始まつて其の孤兒の事や貧しい事、保護者の事など聞かされて、MもHもシンミリさせられた。彼等の多感な心は同情を喚起し温かい友情となつてあらはれた。彼等は互に離るまいと誓つた。血はず、らずとも我等は兄弟であると言つた。

三ヶ月、四ヶ月 運動に勉強に離れた事の無い彼等は「三羽鳥」と稱される様になつた。彼等は益々其の親しさを加へて行つた、そして彼等は御互に幸福だつた



日は去り、日は流れ早くも三年の光陰は過去のものとなつた。日も變つた、Mも變つた、Aも其の人格を一變した。そして彼等の交情も昔のまゝではなかつた、三人の間には小さな川が流れた。握手すれば握手出来る、しかし彼等はそれを欲しなかつたのだ。

Aは時の流のまにまに漂ひ去る人の運命の、不可抗力なるを覺つた、そして表面冷靜を裝ふたもの、彼の心は暗かつた。孤獨の悲哀にAは力強くどらへられた。

生命は輝く

江

俺はセイラー、

津輕喜良市通信

運命の、肌かけた水夫。 彼穩かに、風軟かい内海から始めて大洋中に乗り出した孤舟の船頭だ。 雨？ 風？ 大洋はあれ狂ふ、俺は今、神の試練を受けて居るのだ。 俺はセイラー、 永遠の、光を求むる水夫。 執着の價値と努力の報酬を、忘れぬ腕振り、根限り、 力のこもつた。オールの響よ。

お、 俺の生命は輝く。

當喜良市小林區署には拾數年以來數多の同窓各位が奉職せられ何れも官行研伐事業を擔當せられありしが不肖昨年八月造林事務擔任として赴任勤務中に可成蘇門と縁故深き方なれば其の概要御通信致し候。 當署は本土最北端北津輕郡の南方にあり順路は青森驛與羽線プラントホームを發し約一時間にて川部驛に至り此處にて私設陸奥鐵道に乗り替へ終點五所川原驛に下車之より更に陸路三里東北方に進み漸くにして到着するの地點に有之候、同地は戸數僅に

三百を有する僻陬の一小村にして尋常小學校、役場、駐在所、郵便局の外公衙もなく唯一の建物は我が小林區署にして、高等官署長の外二拾名の署員在勤せられ候、所轄國有林へは至便にして管理經營上最も適當の位置を占むと雖も日常生活を營む上に於ては不便不尠、小林區署所在地として斯かる不便の土地は、當大林區管内にも其の數多からず候。 されど當署部内は所謂津輕ヒバ美林の代表的林分を有し蓄積多く且つ良材に富む事他に比すべくもあらず、當大林區署管内中一二位を占むとの定評に有之候。 而して彼の津輕森林鐵道は青森を發し外ヶ濱海岸に沿ひ北に走り約拾五哩の地點より左折津輕半島を横斷更に南下して當署部内に入り當署よりは年々三萬石乃至數萬石の丸太材を青森貯木場へ輸送致し候青森よりの延長約五〇哩に候。 今當部内國有林面積其他の一二統計に付概略せば 總面積 一、一九七町二七(事業區數二) 總蓄積 六、五〇三、五八九石 内 ヒバ 五、三二七、九六八石 △更に作業級別面積を掲記せば 皆伐喬林 三、〇二二町四八 前更喬林 七、一一六町五五 其他(除地共) 二、六五七町九六 △次に毎年の休採量を示せば 皆喬面積 二八町一八

皆喬材積 八二三石  
 前更面積 六、四七五石  
 前伐 七二町七一  
 后伐 三六、一七一石  
 前更材積 后伐ヒバ 四三、三三石  
 前更作業級に於て當初施業案によれば豫備伐、下種伐、后伐、殿伐等を行ひ更新を計り来りしも大正六年第二次検訂の結果更新の速にして確實なる方法を執り前伐后伐の三回伐採法による事となり幕分の天然力を利用する外大部分に對しては専ら人工補植施行の方針に改められたり

伐木事業實行に當り皆喬にありては地元部落に特賣し又ヒバ林に對しては官行斫伐を行ひ利用の集約を計ると同時に更新の安全を期しつゝあり

更に大正拾年度末に於ける造林面積を示せば

人工植栽地 一、〇四四町五〇  
 ヒバ天然生育地 二、九三三町八二

人工植栽地の樹種は主として杉にして之に次をヒバ、クロマツ、アカマツ、カラマツヒノキ等とす、明治三拾五年より植栽せるも生育状況甚だ不同として未だ間伐の期に達せず僅か落葉松のみに對し幾分行ひしのみなるも今后兩三年の后には益々増加の見込みなりヒバ天然生育地は官行斫伐事業にて前伐せる跡地の補植個所並に全后伐跡地にして年々手入れ撫育等を行ひ人工造林同様特段の施設をなしつゝあり

右補植用ヒバ苗木は年々種子二石を播種して養成に努めつゝあるも尙不足をうけ山中より天然生稚苗を採取し山中苗圃を臨時に設け養成以て補充しつゝあり。造林事業として此の外公有林野官行造林地約百町歩あり、大正拾一年度より年々拾五町歩の植栽を當署にて行ふ豫定にして之が苗木養成をも計劃中なり

嗣つて管理方面を顧るに往時は盜伐を以て有名なりしが巡視歩道の開設を完全ならしめ取締を厳にせし結果全く此の惡習を絶つに至りしは喜ぶべき現象とす

巡視歩道の延長は實に一五四、五二九間にして前記國有林總面積にて除せば一町歩當り一三間弱の割合となる。部内は大體に於て平坦地を呈し右歩道の設置と相待ち國有林巡視には頗る容易なりとす。此の外木材運搬のため設けられあるもの

軌道 四、八〇三間(林鐵の分を不舎)  
 車道 四六〇間  
 牛馬道 四、七三六間 等とす

以上は概要中の大體に候所管理方面の用務は極めて輕微となり各事業方面は今後益々多事多端に向ひつゝ、有之候聊か狀況御通報申上候

終りに臨み各位の御健康を祝し申し候

大正一一、一、八 敬 白  
 在喜良市小林區署 松 館 生

柔道部大會の記

木曾谷の冬は彌が上にも寒く若人の血潮は燃えたつた。そして彼等の發洩たる意氣は發せずしてやまずと見へた。一月二拾三日より日々の放課後彼等の奮闘は繰り返された。試練の幾日かは竹刀の響きと肉塊の相摩とに彼等の汗を流さしめた、二月拾一日紀元節祝賀の式後南部進級の試合は行れて、彼等の努力は酬ひられた

劍道の部

- |         |         |          |
|---------|---------|----------|
| 1 小幡 〇  | 2 吉野 ×  | 3 安江 〇   |
| 4 今井 ×  | 5 唐澤 〇  | 6 吉田 〇   |
| 7 征矢 〇  | 8 藤澤 〇  | 9 村上 ×   |
| 10 片原 × | 11 田口 〇 | 12 三輪 〇  |
| 13 松島 〇 | 14 福澤 〇 | 15 樋口 〇  |
| 16 白洲 × | 17 稻垣 〇 | 18 伊佐治 〇 |
| 19 有賀 〇 | 20 小幡 〇 | 21 小幡 〇  |
- 次に高點試合の結果を示せば
- |             |
|-------------|
| 一等 二年 樋口 静雄 |
| 二等 三年 林 繁市  |
| 三等 三年 小幡 榮一 |
| 四等 三年 稻垣 阪樹 |
- 柔道の部 (小松生)
- 進級試合三本勝負左の如し
- |        |        |         |
|--------|--------|---------|
| 1 小松 〇 | 2 肥田 〇 | 3 小松 〇  |
| 4 湯本 〇 | 5 平川 〇 | 6 長谷川 〇 |
| 7 新村 〇 | 8 安江 〇 | 9 加藤 〇  |

島内先生謝恩金領收報告

早川 嘉一君  
 一金貳圓也  
 累計金百五拾壹圓六拾錢也

林友代領收報告

早川 嘉一君 金貳圓  
 岡西 猛君 金貳圓  
 原 潔君 金貳圓  
 小岩井茂樹君 金貳圓  
 高野 金作君 金貳圓  
 野村 光智君 金壹圓  
 合計金拾壹圓也

記念事業醜金領收報告

吉澤 英雄殿 金五圓  
 樋口 勇殿 金拾圓  
 細窪友一郎殿 金貳圓入  
 星加 正雄殿 金五圓  
 北川 春殿 金貳圓  
 長坂 清人殿 金拾圓  
 横井 正守殿 金拾圓  
 加藤 正次殿 金拾圓  
 原 喜四三殿 金拾圓  
 佐藤 甲子殿 金拾圓  
 坪倉藤三郎殿 金拾圓  
 尾重 清殿 金拾圓  
 小羽根安治殿 金拾圓  
 山村 次一殿 金拾圓  
 小田 實殿 金拾圓  
 田近善右門殿 金拾圓  
 日野 櫻亮殿 金拾圓  
 原 七郎殿 金拾圓  
 丸山 林一殿 金拾圓

- 各級優勝戦(一本勝負)
- |            |            |
|------------|------------|
| 1 安江(二年) × | 2 安江(一年) ○ |
| 3 藤野(三) ×  | 4 相吉(二) ○  |
| 5 水野(二) ○  | 6 水野(二) ○  |
| 7 水野(二) ○  | 以上         |
- 7 中谷(八) 野本 ○ × 9 青木 ○ △ ×  
 上條 ○ △ ○ 辻井 ○ △ ×  
 10 河崎 ○ ○ 11 川上 ○ ○ × 12 清水 ○ ○ ○  
 岩尾 ○ △ ○ 櫻井 ○ ○ ○ × 奥原 ○ ○ ○  
 13 水野 ○ ○ △ × 14 藤野 △ ×  
 小松 ○ ○ ○ ○ ○ 相吉 △ ×
- 次に來賓對本校生との試合及紅白試合あり更に例年に無き五人掛試合あり
- 稲垣 ○ ○ ○ ○ ○
- 岩野 尾野 水吉 相松 小藤

會員動靜

○肥後金四郎君(四回) 名古屋市東區田代町覺王山通梅支店  
 ○上條嘉一郎君(四回) 東京大林區署詰所  
 伐係に轉勤自宅東京市下谷區谷中初音町四の一〇六  
 ○柳澤止之進君 茨城縣高萩小林區署森林主事に(拾二回)  
 ○小岩井茂樹君(一四回) 秋田公有林野官

行造林署  
 ○梅村計介君(拾三回) 岡山縣小田郡矢掛町岡山小林區署官舎、  
 ○森次潔君(拾三回) 岐阜縣郡上郡八幡町造林署官舎、  
 ○丸山嘉市君(拾三回) 岩手縣技手産業技手拜命全縣廳山林課在勤  
 ○横井正守君(拾五回) 熊本公有林野官行造林署へ神任  
 ○橋爪滋君(拾七回) 一月四日永眠哀悼に不堪  
 ○可兒免敏郎君(十七回) 除隊目下岐阜縣可兒郡土田村  
 ○坂卷利一君(十六回) 除隊目下本郡神坂村  
 ○原田久保作君(七回) 宮城縣廳林務課へ  
 ○野口勇君(十七回) 北海道廳林務技手講習終了室蘭營林區分署在勤  
 ○小松義三君(十六回) 青森縣南津輕郡黒石小林區署へ在勤  
 ○中垣英一君(十一回) 松本公有林野官行造林署内務員に轉勤  
 ○橋本瑞穂君(十七回) 名古屋市東區七間町一の一大同電力株式會社名古屋支店へ入社  
 ○原正造君(十三回) 今回原詰と改名下伊那郡市田村瑞璃寺内へ轉居  
 「附記」在々姓名脱落の異動通知に接し候爲自然掲載不可能のもの有之甚だ遺憾に不堪何卒右様の事無之様願上候(係り)

金七圓	代田文之助殿
金拾圓	木下 稗藏殿
金五圓	吉田 良惠殿
金五圓	塚田繁太郎殿
金拾圓	原 恒殿
金拾圓	白木 老雄殿
金七圓	征矢 三郎殿
金五圓	野口 勇殿
金五圓	吉田 正男殿
金拾五圓	岡戸 廣治殿
金拾圓	西野 入德殿
金七圓	米倉 巧殿
金拾圓	北村竹次郎殿
金貳拾圓	吉田 兵太殿
金五圓	伊藤 厚殿
金拾圓	嶽野 利雄殿
金五圓	田澤 秋藏殿
金五圓	喜多村 弘殿
金五圓	久保 照人殿
金拾五圓	木下 武夫殿
金五圓入	木村鐵次郎殿
金八圓	米山 芳郎殿
金壹百圓	大正拾年三月卒業生一同
金五圓	池田 仲治殿
金五圓	古根 勳殿
金五圓	塚田 大殿
金五圓	鈴木 正雄殿
金拾圓	平田 美則殿
金六圓	德武 國久殿
金五圓	遠山 虎雄殿
金拾圓	矢島 駒二殿
金六圓	伊藤 喜代殿

金五圓	福澤 定雄殿
金拾圓	辻 敬二殿
金五圓	服部啓次郎殿
金拾圓	安井 元吉殿
金拾圓	藤卷 壽一殿
金參拾圓	高村 純平殿
金五圓	瀬在 實殿
金五圓	長谷部久雄殿
金九圓	大坪 時治殿
金四拾五圓	秋田蘇門會
金五圓	星 重男殿
金拾圓	水上 壯三殿
金五圓	竹村 節三殿
金五圓	安藤 清吉殿
金拾圓	三宅 寶州殿
金五圓	森次 潔殿
金拾圓	細江七兵衛殿
金拾圓	高橋 作治殿
金五圓	赤羽 三郎殿
金五圓	井上新次郎殿
金拾五圓	柳澤 熊治殿
金五圓	關 琴義殿
金八圓	山下 藤一殿

合計金七百五拾參圓也  
累計金壹千四百〇四圓也

(以下 次 號)

香奠料領收報告

故飯沼要人君への香奠料を送附致され候諸兄左の通り

金壹圓也	安井 嘉一君
全	小崎 次郎君
全	長崎 千万一君
全	田近善右工門君
全	中田 穰君
全	吉川 真去君

計金六圓也

故福田友治郎君への吊慰金左の通り

金壹圓也(申込)	大脇 又衛君
金壹圓也(申込)	武久 真一君
金貳圓也	辻 敬二君
金貳圓也	尾重 清君

訂 正

前號掲載「間伐について」の中に浄書の際誤記致し候爲投稿者より注意致され候間此の段訂正仕り謹で粗瀆を奉謝候

拾四行目	1302	は	1902
廿五行目	C	は	eの誤
廿八行目	第三級	は	第二級の誤

大正十一年二月廿三日印刷  
大正十一年二月廿五日發行

長野縣四筑摩郡福島町六番地  
編輯兼發行人 安井正夫  
長野縣松本市小柳町全番地  
印刷 川吉藏

長野縣松本市小柳町六番地  
印刷 所 淺川活版所  
長野縣四筑摩郡福島町六番地  
發行 所 蘆澤書店

【定價金參錢】